

九州西部・琉球方言の動詞テ形・夕形に起こる 音韻現象についての試論

有元光彦

An Essay on Phonological Phenomenon of the Verb *te*-form and *ta*-form
in the West Kyushu Dialect and the Ryukyu Dialect

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 26, 2003)

0. はじめに

有元光彦(2003)等の一連の拙論によって、有元は九州西部方言の動詞活用形の1つであるテ形(連用形の1つ、接続形)に見られる、いわゆる「テ形現象」を観察してきた。¹

本論文の目的は、九州西部3方言及び琉球(奄美)1方言を対象として、テ形現象がテ形だけでなく、夕形にも適用される方言が存在するという事実を示すとともに、テ形と夕形に起こる音韻現象の関連性を探ることにある。

1. テ形現象について

まず、テ形現象とはいかなるものであるのかを見ていく。具体的には、次のような方言データ(長崎県福江市下崎山町)を見ればよい。

【表1】²

語 幹	音 声 形	共通語の「テ」 に相当する部分
kaw <買う>	kokkita <買って来た>	Q
orab <叫ぶ>	oronkita <叫んできた>	N
jom <読む>	jonkita <読んできた>	N
kas <貸す>	kakkita <貸してきた>	Q
kak <書く>	kakkita <書いて来た>	Q
ojog <泳ぐ>	ojonkita <泳いできた>	N
tor <取る>	tottekita <取ってきた>	te
kat <勝つ>	katttekita <勝ってきた>	te
sin <死ぬ>	ʃindemiro <死んでみろ>	de

mi <見る>	mitekita <見てきた>	te
oki <起きる>	okitekita <起きてきた>	te
de <出る>	dekkita <出てきた>	Q
uke <受ける>	ukekkita <受けてきた>	Q
it <行く>	ittekita <行ってきた>	te
ki <来る>	kitemire <来てみる>	te
s ~ se <する>	sekkita <してきた> jitekita	Q/te

【表1】から分かるように、共通語の「テ」に相当する部分には、[te],[de]だけでなく、促音や撥音も現れている。しかも、重要なことは、これら4種類の音声の現れ方は、動詞の種類に依存しているということである。即ち、動詞の語幹末分節音 (stem-final segment) の違いによって、4種類の音声の分布が決まるのである。【表1】の下崎山方言では、次のような分布が見られる。

- (1) a. 促音で現れる場合は、語幹末分節音が /w,s,k,e/ のときである。
- b. 撥音で現れる場合は、語幹末分節音が /b,m,g/ のときである。
- c. [te] で現れる場合は、語幹末分節音が /r,t,i/ のときである。
- d. [de] で現れる場合は、語幹末分節音が /n/ のときである。

以上の事実から、テ形現象とは、次のように定義される (cf. 有元光彦 (2003))。

(2) テ形現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」に相当する部分が、促音や撥音で現れる形式が存在する場合と、存在しない場合がある、という現象を「テ形現象」と呼ぶ。

以上のように、テ形現象は動詞活用形の1つである「テ形」に起こる形態音韻現象である。しかし、ここで1つの問題が生じてくる。それは、なぜテ形現象はテ形にしか現れない（起こらない）のだろうかということである。同じような適用領域を持つ「音便現象」は、共通語にも見られるように、テ形にもタ形にも見られる。例えば、共通語では、促音便がテ形である [katte] <買って>にも、タ形である [katta] <買った>にも見られる。このことから類推すると、テ形現象がタ形にも見られる可能性は十分にある。

2. タ形に見られるテ形現象

テ形現象がタ形にも見られることを示すため、本節では鹿児島県上甕島・瀬上方言を扱う。【表2】にテ形とタ形のデータを並べて挙げる。³

【表2】

語 幹	テ 形	タ 形
/kaw/ <買う>	uro:re <買って>	ko:ra <買った>
/tob/ <飛ぶ>	to:ne <飛んで>	to:na <飛んだ>
/jom/ <読む>	jo:ne <読んで>	jo:na <読んだ>
/hos/ <干す>	he:re <干して>	he:ra: <干した>
/kak/ <書く>	ke:re <書いて>	ke:ra <書いた>
/kog/ <漕ぐ>	ke:ne <漕いで>	ke:na <漕いだ>
/uj/ <売る>	totte <取って> ⁴	utta <売った>
/tat/ <立つ>	tatte <立って>	tatta <立った>
/sin/ <死ぬ>	ʃinnemo <死んでも>	ʃinna <死んだ>
/mi/ <見る>	mitemo <見ても>	mita <見た>
/oki/ <起きる>	-----	-----
/de/ <出る>	deremo <出ても>	-----
/uge/ <受ける>	-----	ugera <受けた>
/i/ ~ /it/ <行く>	-----	-----
/ki/ <来る>	kitemo <来ても>	kita <来た>
/s/ <する>	ʃite <して>	ʃita: <した>

まず、【表2】からテ形の分布をまとめると、次のようになる。⁵

- (3) a. 共通語の「テ」に相当する部分の音声は、[re],[ne],[te]で現れている。
- b. [re]で現れる場合は、語幹末分節音が /w, s, k, eɪ/ のときである。
- c. [ne]で現れる場合は、語幹末分節音が /b, m, g, n/ のときである。
- d. [te]で現れる場合は、語幹末分節音が /j, t, iɪ/ のときである。

(3)から分かるように、共通語の「テ」に相当する部分に現れる3種類の音声 [re],[ne],[te] は、下崎山方言の Q, N/de, te にそれぞれ対応している。しかし、下崎山方言と異なる点は、瀬上方言では、下崎山方言に現れる促音や撥音が現れていないということである。即ち、下崎山方言と瀬上方言においては、共通語の「テ」に相当する部分の音声の種類は異なるが、それらが現れる環境 (environment) は一致しているのである。この性質を考慮して、有元光彦 (2001b, 2002, 2003) 等では、瀬上方言に起こるこのような現象を「擬似テ形現象」と呼び、この現象が起こる方言を「擬似テ形現象方言」と呼んでいる。

しかし、さらに興味深い事実が見られる。この擬似テ形現象は、テ形だけでなくタ形にも見られるのである。【表2】のタ形の分布をまとめると、次のようになる。

- (4) a. 共通語の「夕」に相当する部分には、[ra],[na],[ta] が現れている。
 b. [ra] で現れる場合は、語幹末分節音が /w, s, k, e2/ である。
 c. [na] で現れる場合は、語幹末分節音が /b, m, g, n/ である。
 d. [ta] で現れる場合は、語幹末分節音が /j, t, i 1 / である。

(3), (4)を比較すると、(3b,c,d) と (4b,c,d) の環境がおおよそ一致していることが分かる。異なっているのは (3a) と (4a) であるが、それぞれ3種類の音声の初頭音は [r],[n],[t] で一致している。

以上より、瀬上方言においては擬似テ形現象がテ形にも夕形にも見られるということが判明した。

次に問題となることは、擬似テ形現象を司る規則群についてである。即ち、擬似テ形現象はどのような規則群の集合によって実現される現象であるのかという問題である。それらの規則群を次に挙げる (cf. 有元光彦 (2003))。

- (5) a. テ形接辞 t/r 交替規則：

語幹末分節音が Y でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /t/ を /r/ に交替させよ。

Y=/j,t,n/

- b. テ形接辞 d/n 交替規則：

語幹末分節音が Z でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /de/ の /d/ を /r/ に交替させよ。

Z=/j,t/

- c. 逆行同化規則：

形態素末・単語末の子音を、その直後にある子音に、鼻音性以外の点で、同化せよ。

- d. 有声性順行同化規則：

語幹末分節音が有声音であるとき、形態素境界を挟んで直後の子音を有声音にせよ。

- e. i 挿入規則：

/t/ で始まる活用接辞が動詞語幹に付与されたとき、語幹末分節音 /s, k, g/ の直後に、/i/ を挿入せよ。

- f. 音便規則：

初頭音に /t/ を持つ活用接辞が語幹に付与される際、語幹末子音及びその直前の母音が融合して、次のような音便現象を起こす。

om → oo

am → {oo, o}

aw → {oo, o}

ob → {oo, o}

ub → {uu, u}

ab → o

- g. s,k,g 消去規則：

/t/ で始まる活用接辞が動詞語幹に付与されたとき、語幹末の /i/ の直前の /s,k,g/ を消去せよ。

h. 母音融合規則：

次の母音連続を融合せよ。

ai → {ee, e, aa}

ei → ee

oi → {ee, e, oo}

(5)の規則群のうち、(5a,b)は擬似テ形現象を司る方言特有の規則である。(5e,f,g,h)は音便現象を司る規則である。

3. テ形とタ形との関係

第2章では、テ形現象に類似した現象である擬似テ形現象がテ形にもタ形にも見られるような方言が存在することを確認したが、擬似テ形現象方言以外のパターンを持つ方言群では、同様の現象が見られるのであろうか。

本節では、テ形とタ形にどのような現象が起きているのか、テ形とタ形との関係を観察するために、いくつかのパターンの方言を扱っていく。

3.1. 下崎山方言

本節では、「テ形現象方言」の代表として、長崎県福江市下崎山方言を扱う。⁶ 前述した【表1】のテ形のデータも併せて、【表3】にテ形・タ形のデータを挙げる。

【表3】

語 幹	テ 形	タ 形
kaw <買う>	kokkita <買って来た>	ko:ta kota <買った>
orab <叫ぶ>	oronkita <叫んできた>	oranda oroda <叫んだ>
jom <読む>	jonkita <読んできた>	jo:da joda <読んだ>
kas <貸す>	kakkita <貸してきた>	kajita kata <貸した>
kak <書く>	kakkita <書いて来た>	kaita kata <書いた>
ojog <泳ぐ>	ojonkita <泳いできた>	ojoida ojoda ojonda <泳いだ>
tor <取る>	tottekita <取ってきた>	totta <取った>
kat <勝つ>	kattékita <勝ってきた>	katta <勝った>
sin <死ぬ>	jindemiro <死んでみる>	jinda <死んだ>
mi <見る>	mitékita <見て来た>	mita <見た>

oki <起きる>	okitekita <起きてきた>	-----
de <出る>	dekkita <出てきた>	deta <出た>
uke <受ける>	ukekkita <受けてきた>	-----
it <行く>	ittekita <行ってきた>	itta ita <行った>
ki <来る>	kitemire <来てみる>	kita <来た>
s ~ se <する>	sekkita <してきた> jitekita	jita <した>

まず、前述したとおり、テ形においては、「テ」に相当する部分の音声に促音・撥音・[te]・[de]の4種類が現れており、次のような分布が見られる（(1)の再掲）。

- (6) a. 促音で現れる場合は、語幹末分節音が /w,s,k,e/ のときである。
- b. 撥音で現れる場合は、語幹末分節音が /b,m,g/ のときである。
- c. [te] で現れる場合は、語幹末分節音が /r,t,i/ のときである。
- d. [de] で現れる場合は、語幹末分節音が /n/ のときである。

一方、夕形における分布をまとめてみると、次のようになる。

- (7) a. [ta] で現れる場合は、語幹末分節音が /w,s,k,r,t,i,e/ のときである。
- b. [da] で現れる場合は、語幹末分節音が /b,m,g,n/ のときである。

(7)から分かるように、共通語の「夕」に相当する部分には [ta],[da] という2種類の音声しか現れていない。

さて、(6)と(7)を比較して分かることは、テ形と夕形では現れる音声の種類数が異なっているということである。テ形には4種類、夕形には2種類の音声それぞれが現れている。即ち、テ形にはテ形現象が起こっているが、夕形にはそれが起こっていないということである。そうであるならば、夕形にはどのような現象が起こっているのだろうか。それは音便現象である。次のようにまとめられるだろう。⁷

- (8) a. 促音便……………語幹末分節音が /r,t/ であるとき
- b. 撥音便……………語幹末分節音が /b,g,n/ であるとき
- c. イ音便……………語幹末分節音が /k,g/ であるとき
- d. ウ音便……………語幹末分節音が /w,b,m,g/ であるとき
- e. 短音便……………語幹末分節音が /s,k/ であるとき

このように、下崎山方言の夕形には様々な音便現象が起こっている。

従って、下崎山方言においては、テ形にはテ形現象が、夕形には音便現象が起こっていると言える。

次に、テ形現象を司る規則群について見てみる。下崎山方言のテ形には、次のような規則が存在する (cf. 有元光彦 (2003))。

(9) a. e 消去規則：

語幹末分節音が非継続的歯音 (/r,t,n/) でない動詞語幹に、テ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

b. 逆行同化規則：

形態素末・単語末の子音を、その直後にある子音に、鼻音性以外の点で、同化せよ。

c. 単語末子音群簡略化規則：

単語末で2つの子音が連続するとき、単語末の方の子音を消去せよ。

d. 単語末有声子音鼻音化規則：

単語末の有声子音 /g,b,m,n/ を鼻音化せよ。

e. 有声性順行同化規則：

語幹末分節音が有声音であるとき、形態素境界を挟んで直後の子音を有声音にせよ。

f. i 挿入規則：

/t/ で始まる活用接辞が動詞語幹に付与されたとき、語幹末分節音 /s/ の直後に、/i/ を挿入せよ。(ただし、/s/ <する> のみに適用)

(9a) はテ形現象を司る方言特有の規則である。(9b,e,f) は、多少環境が異なる場合もあるが、他方言にも見られる規則である。

一方、夕形に適用される規則群としては、(8)を適用環境とする音便規則だけである。この中には、aw → o(o) のような母音融合規則や、語幹末子音を促音や撥音に交替させる規則などが含まれる。

3.2. 長崎市方言

本節では、「非テ形現象方言」の代表である長崎県長崎市方言について扱う。⁸ データは塚本明廣 (1978) から引用する。データは【表4】の通りである。

【表4】

語 幹	テ 形	夕 形
kaw <買う>	kote <買って>	kota <買った>
job <呼ぶ>	jonde <呼んで>	jonda <呼んだ>
jom <読む>	jonde <読んで>	jonda <読んだ>
os <押す>	ojite <押して>	ojita <押した>
kak <書く>	kaite <書いて>	kaita <書いた>
tug <注ぐ>	tsuide <注いで>	tsuida <注いだ>

war <割る>	watte <割って>	watta <割った>
kat <勝つ>	katte <勝って>	katta <勝った>
sin <死ぬ>	ʃinde <死んで>	ʃinda <死んだ>
mi <見る>	mite <見て>	mita <見た>
oki <起きる>	okite <起きて>	okita <起きた>
de <出る>	dete <出て>	deta <出た>
age <上げる>	agete <上げて>	ageta <上げた>
it <行く>	itte <行って>	itta <行った>
ki <来る>	kite <来て>	kita <来た>
s <する>	ʃite <して>	ʃita <した>

まず、【表4】のテ形において、共通語の「テ」に相当する部分に現れる音声に注目すると、次のような分布があることが分かる。

- (10) a. [te] で現れる場合は、語幹末分節音が /w,s,k,r,t,i,e/ のときである。
 b. [de] で現れる場合は、語幹末分節音が /b,m,g,n/ のときである。

即ち、「テ」に相当する部分には [te] または [de] の2種類が現れ、それらの現れ方は動詞の種類、即ち語幹末分節音の違いによって決まるのである。

これは夕形においても同様であり、次のような分布が見られる。

- (11) a. [ta] で現れる場合は、語幹末分節音が /w,s,k,r,t,i,e/ のときである。
 b. [da] で現れる場合は、語幹末分節音が /b,m,g,n/ のときである。

(11)を見ると分かるように、夕形においても、「夕」に相当する部分には [ta] または [da] の2種類が現れている。

さらに、興味深いことは、テ形においても夕形においても同じ音便現象が起こっているという点である。まとめると、次のようになる。

- (12) a. 促音便……語幹末分節音が /r,t/ であるとき
 b. 撥音便……語幹末分節音が /b,m,n/ であるとき
 c. イ音便……語幹末分節音が /k,g/ であるとき
 d. ウ音便……語幹末分節音が /w/ であるとき

以上から分かるように、長崎市方言では、テ形にも夕形にも音便現象が起こっているのである。

従って、この音便現象を司る規則群は、(12)を適用環境とする音便規則を仮定すればよい。具

体的には、aw → o といった母音融合規則や、語幹末分節音の交替規則が含まれることになる (cf. McCawley (1968), Kuroda (1979), Vance (1987))。

3.3. 大勝方言

本節では、琉球方言圏（奄美方言群）の1方言である鹿児島県大島郡龍郷町^{おおがち}大勝方言を扱う。大勝方言のデータは、名嘉真三成 (1992) から引用し、【表5】に挙げる。⁹

【表5】

語 幹	テ 形	タ 形
/kaw/ <買う>	koti <買って>	kotaN <買った>
/tub/ <飛ぶ>	tudi <飛んで>	tudaN <飛んだ>
/jum/ <読む>	judi <読んで>	judaN <読んだ>
/hus/ <干す>	hufji <干して>	hufjaN <干した>
/kak/ <書く>	kafji <書いて>	kafjaN <書いた>
/kug/ <漕ぐ>	kuɕi <漕いで>	kuɕaN <漕いだ>
/nij/ <見る>	nifi <見て>	nifaN <見た>
/tur/ <取る>	tuti <取って>	tutaN <取った>
/k ^ʔ ir/ <切る>	k ^ʔ ifji <切って>	k ^ʔ ifjaN <切った>
/mat/ <待つ>	matfji <待って>	matfjaN <待った>
/sin/ <死ぬ>	ʃiɕi <死んで>	ʃiɕaN <死んだ>
/siti/ <捨てる>	sititi <捨てて>	sititaN <捨てた>
/kē/ <越える>	kēti <越えて>	kētaN <越えた>
/i/ ~ /it/ <行く>	ʔiɕi <行って>	ʔiɕaN <行った>
/ki/ <来る>	ʃit ^ʔ i <来て>	ʃit ^ʔ aN <来た>
/s/ <する>	ʃi: <して>	ʃaN <した>

【表5】から、テ形の「テ」に相当する部分とタ形の「タ」に相当する部分には、同じような音声が現れていることが分かる。それらの音声の分布は、それぞれ次のようになっている。¹⁰

- (3) a. 共通語の「テ」に相当する部分の音声は、[ʃi],[ʃi],[ɕi],[ti],[di] で現れている。
 b. [ʃi] で現れる場合は、語幹末分節音が /s, k, j/ のときである。
 c. [ʃi] で現れる場合は、語幹末分節音が /t, r*/ のときである。
 d. [ɕi] で現れる場合は、語幹末分節音が /g, n/ のときである。
 e. [ti] で現れる場合は、語幹末分節音が /w, r, i, ë/ のときである。
 f. [di] で現れる場合は、語幹末分節音が /b, m/ のときである。

- (14) a. 共通語の「夕」に相当する部分の音声は、[jaN],[tʃaN],[ɕaN],[taN],[daN] で現れている。
- b. [jaN] で現れる場合は、語幹末分節音が /s, k, j/ のときである。
- c. [tʃaN] で現れる場合は、語幹末分節音が /t, r*/ のときである。
- d. [ɕaN] で現れる場合は、語幹末分節音が /g, n/ のときである。
- e. [taN] で現れる場合は、語幹末分節音が /w, r, i, ë/ のときである。
- f. [daN] で現れる場合は、語幹末分節音が /b, m/ のときである。

さて、(13), (14)を見る限りでは、共通語の「テ」「夕」に相当する部分に、複数の音声が現れており、しかもそれらの現れ方は語幹末分節音の違いによっていることが分かる。よって、テ形にも夕形にも同じ現象が起こっていると言えよう。ただ、問題は、それがテ形現象であるのか音便現象であるのか、それとも別の現象であるのかということである。

この問題に解答するためには、大勝方言に適用されている音韻規則を考えてみる必要がある。ここでは、次のような音韻規則が適用される (cf. 有元光彦 (1997)).¹¹

- (15) a. $t \rightarrow s / \{k, s, j\} + _$
- b. $\{k, t\} \rightarrow s / _ + s$
- c. 硬口蓋化：語幹末子音が [-cont, -lab] のとき、または語幹が /Cir+/ (Cは子音) のとき、接辞 /+ti/ の初頭音 /t/ は硬口蓋化する。
- d. $C \rightarrow [+voice] / [+cons, -cont, +voice] + _$
- e. $[+voice] \rightarrow \phi / _ + C$

(15d) は他の方言にもある有声性順行同化規則である。これは、非継続的な有声の語幹末子音の直後の子音を有声にするものである。これは他方言にも広く見られる規則である。従って、汎用的な音韻規則 (15d) に、大勝方言に独特な音韻規則 (15a,b,c,e) が組み合わさっているということになる。汎用的な音韻規則 (15d) は、音便現象が起こる方言に存在するものである。それに方言特有の音韻規則が組み合わされているということは、少なくとも大勝方言に起こっている現象は音便現象ではないということになる。

本論文では、大勝方言に起こる現象を仮に「#テ形現象」と呼んでおく。

4. 比較

本節では、本論文で扱った4方言を比較することにより、テ形と夕形の関係を明確化する。まず、共通語の「テ」「夕」に相当する部分の音声をまとめると、次のようになる。

【表6】

	テ 形	夕 形
長崎市方言	[te],[de]	[ta],[da]
下崎山方言	[te],[de],Q,N	[ta],[da]
瀬上方言	[re],[ne],[te]	[ra],[na],[ta]
大勝方言	[i],[tʃi],[ɕi],[ti],[di]	[jaN],[tʃaN],[ɕaN],[taN],[daN]

【表6】から分かるように、下崎山方言以外においては、テ形と夕形に現れる音声の種類はほぼ同じである。特に、それらの初頭音は全く同じである。しかし、下崎山方言においてだけは、テ形と夕形に現れる音声の種類が異なる。

このことを音韻規則のレベルで考えると、次のようにまとめられよう。

【表7】

	方言特有規則	有声性順行同化規則	子音群簡略化規則	逆行同化規則	母音融合規則	語幹末子音交替規則
長崎市方言	×	○	×	×	○	○
下崎山方言	e 消去規則	○	○	○	○	○ (g,b,m,n 語幹動詞)
瀬上方言	接辞初頭音交替規則	○	○	○	○	○ (s,k,g 語幹動詞)
大勝方言	硬口蓋化規則	○	○	○	○	○ (k,t 語幹動詞)

【表7】の中で、母音融合規則と語幹末子音交替規則は、音便現象を司る音韻規則である。有声性順行同化規則も、伝統的な意味での「音便」には含まれていないが、音便現象の引き金(trigger)となる点で、音便現象の一部であると考えられる。一方、方言特有規則においては、それぞれの音韻規則が、テ形現象や擬似テ形現象、あるいは#テ形現象を司る音韻規則である。従って、【表7】の規則群は、各方言ごとに次のようにまとめられよう。

- (16) a. 長崎市方言 = 音便現象を司る規則
 b. 下崎山方言 = 音便現象を司る規則 + テ形現象を司る規則
 c. 瀬上方言 = 音便現象を司る規則 + 擬似テ形現象を司る規則
 d. 大勝方言 = 音便現象を司る規則 + #テ形現象を司る規則

(16) から分かるように、音便を司る規則群はすべての方言に存在する。(16b,c,d) では、これに方言特有の現象を司る規則群が加わった集合となっている。

さらに、【表7】に挙げた適用される音韻規則の数を比重として(16)に組み込むと、次のような等号・不等号の関係が出来上がる。

- (17) a. 長崎市方言：音便現象を司る規則 > (テ形現象を司る規則)
 b. 下崎山方言：音便現象を司る規則 = テ形現象を司る規則
 c. 瀬上方言：音便現象を司る規則 < 擬似テ形現象を司る規則
 d. 大勝方言：音便現象を司る規則 < #テ形現象を司る規則

(17a) では、テ形現象を司る規則は存在しないのであるが、それを記号 () で括って表すと、このような関係が仮定できる。下崎山方言では、(17b) のように、両者に同等の比重がかかっている。一方、(17c,d) では、いずれも右側に比重がかかっている。

有元光彦 (2003) では、この比重の関係を、テ形現象や音便現象の“運営力”として捉えている。即ち、共通語の「テ」「夕」に相当する部分の音声の種類が3～4種類であるテ形現象方言（下崎山方言）においては、テ形現象を司る規則と音便現象を司る規則が同じ程度の優勢性を持って作用している。従って、テ形はテ形現象が運営し、夕形は音便現象が運営するといった、いわば“棲み分け”が働いている。¹² 一方、大勝方言では、共通語の「テ」「夕」に相当する部分に5種類もの音声が見れており、これらを運営するためにはテ形と夕形とを一括して#テ形現象が運営する方が効率がよいのである。

この仮説は、共通語の「テ」「夕」に相当する部分の音声の種類数を基準として、テ形と夕形がどのような現象によって運営されるのか（テ形と夕形という場にどのような現象がどのように棲み分けを行っているのか）という問題提起の上に構築されたものである。現時点では、音便現象・テ形現象・擬似テ形現象に関しては、この仮説が適用できそうであるが、問題は琉球諸方言に現れる#テ形現象である。これら3つの現象が同じ座標上のものであるのかどうか、現時点では判断できていない。テ形・夕形を司る4つの現象がどのような座標を構成するのか、全体像を明らかにすることが今後の課題である。

5. まとめ

本論文では、テ形現象はテ形だけに見られるという従来の考えを否定し、テ形にも夕形にもテ形現象が見られるデータを提示した。また、その事実を出発点として、テ形と夕形との関係を明確化する試論を提出した。そして最終的に、音便現象・テ形現象・擬似テ形現象・#テ形現象という4つの現象が、1つの座標上の現象にまとめられる可能性があることを示した。

しかし、この問題に解答するためには、圧倒的にデータが不足している。琉球諸方言のデータをはじめとして、擬似テ形現象方言のデータも必要である。今後の新たな発見に期待するしかない。

参照参考文献

- 有川郁代 (2001) 「島原半島南端地域方言における動詞テ形について」平成12年度安田女子大学文学部卒業論文（未公刊）
- 有元光彦 (1988) 『長崎県福江市下崎山町方言の音韻論及び形態論』九州大学大学院文学研究科修士論文（未公刊）
- (1990) 「五島列島・下崎山町方言の動詞の「テ形」における音韻現象について」『国語学』163集 国語学会編 左 pp.27-38
- (1991) 「五島列島・下崎山町方言の動詞の音便現象について」『文学研究』第88輯九州大学文学部編 左 pp.181-204
- (1996) 『琉球諸方言の動詞活用形の研究：データ篇 奄美方言』平成7 (1995) 年度文部省科学研究費補助金・奨励研究 (A) 「琉球方言をモデルとした新しい対照方言学の試み」(課題番号：07710364) 研究成果報告書 pp.1-279
- (1997) 『奄美方言の規則動詞活用形における方言差の研究』平成8 (1996) 年度文部省科学研究費補助金・奨励研究 (A) 「方言規則地図

- の提唱とその理論的研究」(課題番号:08710374)研究成果報告書 pp.1-114
- (1998)「規則の有無を基準とした方言差についての試論—奄美5方言をデータとして—」『国語国文論集』第28号 安田女子大学日本文学会編 左 pp.1-9
- (2000)『「海の道」システム—九州西部島嶼部方言における動詞テ形現象—』平成10—11年度文部省科学研究費補助金・奨励研究(A)「九州島嶼部方言における「海の道」の実証とその方言差の理論的研究」(課題番号:10710262)研究成果報告書
- (2001a)「「海の道」方言圏の可能性—九州西部地域方言の動詞テ形について—」『筑紫語学論叢』迫野虔徳編 風間書房 左 pp.23-35
- (2001b)「九州方言における動詞テ形の音韻規則」『音声研究』日本音声学学会編 pp.19-26
- (2002)「2つの連続性と2本の「海の道」—九州西部諸方言の動詞テ形に起こる音韻現象—」『国語学』国語学会編 pp.1-16
- (2003)『九州西部方言における動詞「テ形現象」の記述的研究』(ms.)
- 編著 (2003)『長崎県南高来郡小浜町・千々石町方言の記述的研究』平成14年度安田女子大学講義「日本文化文学実地研究」研究成果報告書 pp.1-107
- 藤田勝良 (1992)「方言におけるバ行・マ行動詞のウ音便形の存立について」『佐賀大國文』第20号 pp.14-47
- (1993)「方言におけるバ行・マ行動詞のウ音便形の存立について (II)」『佐賀大國文』第22号 左 pp.1-12
- (1995)「方言におけるバ行・マ行動詞のウ音便形の存立について (III)」『佐賀大國文』第23号 左 pp.1-10
- 平山輝男ほか (1969)『五島列島の方言』(都市の言語と周辺の言語(その1))東京都立大学都市研究委員会・都市研究調査報告1
- 上村孝二 (1965)「上甌島瀬上方言の研究」『鹿児島大学法文学部紀要・文学科論集1』
- (1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- Kuroda, S.-Y. (1979) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Garland. 九州方言学会編 (1969/1991)『九州方言の基礎的研究(改訂版)』風間書房
- 松田知子 (1999)「動詞連用形に接続する助詞「テ」を中心にみた琉球方言と西日本方言との関連性」『日本方言研究会第68回研究発表会発表原稿集』pp.1-8
- McCawley, J.D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, Mouton.
- 宮良信詳 (1995)『南琉球八重山石垣方言の文法』くろしお出版
- 名嘉真三成 (1992)『琉球方言の古層』第一書房
- 尾形佳助 (1987)『上甌島瀬上方言の形態音韻論』九州大学大学院文学研究科修士論文(未公開)
- 塚本明廣 (1978)「長崎市方言の動詞活用表」『文学研究』第75輯 九州大学文学部編 pp.39-55
- Vance, T.J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*, State University of New York Press.

注

- 1 「テ形現象」という用語は便宜的なものである。
- 2 右端列欄の記号 Q は促音を、N は撥音をそれぞれ表す。
- 3 データは、尾形佳助 (1987) から引用する。ここではカタカナ表記であるため、本論文では音声記号に直してある。また、若干修正を加えている箇所がある。
- 4 語幹は /toj/ <取る> である。
- 5 (3), (4) の中で、語幹末分節音 /el/ は 1 音節語幹の e 語幹動詞を、/il/ は 1 音節語幹の i 語幹動詞をそれぞれ表す。また、/e2/ は 2 音節以上の語幹の e 語幹動詞である。
- 6 有元光彦 (2001b, 2002) 等では、下崎山方言のようなタイプを「真テ形現象方言」と呼んでいたが、本論文では、有元光彦 (2003) に従い、「テ形現象方言」と呼ぶ。いずれにしても、名称は便宜的なものである。
- 7 [kota] <買った> のような形をウ音便とすべきかどうか、また [kata] <貸した> のような形を音便とみなすかどうか（「短音便」という用語は便宜的なものである）については、議論の余地がある。
- 8 「非テ形現象方言」とは、有元光彦 (2001b, 2002, 2003) 等の用語で、テ形現象が起こらない方言を指す。
- 9 ただし、名嘉真三成 (1992) には、原データではなく、分析を施したデータが表にされて載っている。ここでは、それを有元が原データに戻したものを掲載している (cf. 有元光彦 (1996, 1997, 1998))。
- 10 (13), (14) では不規則動詞は外している。また、/r*/ は「語幹末分節音の直前の母音が /i/ である 1 音節の r 語幹動詞」を指している。これについては、振る舞いが明らかになっていない。
- 11 適用順序は a → c → b → d → e である。
- 12 有元光彦 (2003) では、“棲み分け” を説明する具体的なツールとして、音便現象とテ形現象の“中和”“分離”という概念を仮定している。